

称名のころ

ご讃題 設我得佛 十方衆生 至心信樂 欲生我国 乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆誹謗正法 (Ref 仏説無量寿經 第十八願文)

Ref 育成研修部編集、勸学寮監修『真宗の教義と安心』P47

一、はじめに

親鸞聖人によって明らかにされた浄土真宗のみ教えが本願力回向の**名号**の聞信という素晴らしいものを有しているのに、「**信心正因 称名報恩**」のご常教という制約によってその良さを発揮できず、その結果、本願念仏のみ教えが現代社会に広がって行かないとしたら、それはとても悲しく残念なことであります。そこで、本日はできる限りご常教の制約を離れて、親鸞聖人のみ教えに立ち却って考えてみたいと存じます。

二、乃至十念の誓い

ここでは、第十八願文に誓われた「乃至十念」の御文のお心についてお尋ねしてみることに致します。はじめに、ご常教の立場にたつ「乃至十念」の解説を引きます。Ref には次のように示されています。

乃至十念というのは、称名の多い少ないを問わないということであり、親鸞聖人は聞名のものまで含めて示されている(尊号真像銘文、註釈版聖典 P657)ことを勘案すると、称名の有無も問わないことを意味する。これは称名念仏によって往生成仏が決定するのではないということの意味している(Ref p48)。

これは、第十八願文の至心・信樂・欲生という三心と乃至十念という行とを対比してどちらが往生成仏の因であるかという結論を導く為に十念の形式表現をとらえたロジックであります。

これは、見れば見る程にまことにおかしなものの考え方であるといわざるを得ません。なぜなら、第十八願文にはそもそも三心と十念とが誓われているのですから、一方が正因に関わらないと言及することは阿弥陀如来のご本願の謂れに踏み込む不遜の領域に入るからです。

このような説問が設定される背景には、覚如上人によって確立された「信心正因称名報恩」の教説があり、これを金科玉条として奉ってきた長い伝統があるからだと考えられます。

すなわち信心が浄土往生の正因なのだから、正因の為には十念が余ってしまいます。そこで阿弥陀如来のお心やいかにとというのが「十念誓意」だからです。かかる視点で捉える限り十念誓意という論題にはそれ自体無理があると言わざるを得ないと考えられます。何故なら第十八願文は經典のお言葉であり、「信心正因称名報恩」という法理は後世に至って出現したのだからです。

三、親鸞聖人の行信不離の念仏往生のお立場から

では、親鸞聖人の教説に立ち返るとどうなるのでしょうか。

第十八願文は衆生往生の願文ですから、乃至十念と云う行は衆生の行であるものの、「六字釈」によれば、六字そのものが往生の行として阿弥陀如来から本願力回向されています。

「乃至十念」は、阿弥陀如来から賜る衆生の行であることとなります。

衆生はそれを頂戴して称えるばかり。

ところでどうでしょう。本願力回向によって称名念仏が賜ってあるそのわけは、如来様が称えさせてわが名を聞かしめようとの思召しではなかったかと考えるのが自然ではないでしょうか。

なぜなら、身口意の三業の中で口業だけが称えるという行者の行(本願力廻向だからその本質は如来様の行)でありながら、直後に聞こえて

下さるといふ行者を離れた効果をもたらすからです。これはまことに不思議なことであります。

これについて親鸞聖人は、また、「南無阿弥陀仏をととなふるは、佛をほめたてまつるになるとなり(銘文、註 P655)」とおっしゃっています。

諸仏如来の名号讃嘆のその名号を聞くというのが第十七願・十八願成就文のお示しでしたから、ここに「**称えれば聞こえて下さるお名号をお聞かせに与る**」という太いロジックが成立することになります。

こうして、衆生は称えれば聞こえて下さるお名号に聞き入る世界をめぐまれたことになります。

そうすると、南無阿弥陀仏は本願力回向の大道ですから、時を選ばず働いていて下さることになります。時を選ばず働いていて下さるそのお姿が一つには「乃至」のおこころだと頂戴することができます。

やがて、はからいのとりこだったこの私にも、聞こえて下さるお名号が如来様のお喚び声だと頂戴できるそのときがやって参ります。

如来様のお喚び声が聞こえたそのときこそは、私^{きがいけんそ}がわがはからいから解き放たれた瞬間ですから、これを「疑蓋間雑あることなし」と示して、「信楽(=信心)」を頂戴したときだと親鸞聖人はお示し下さったのです。

だから、信心には最初のそのときがあり、これを信心の「時剋^{じこく}釈」というのであります。

また、信心を頂戴するときには、疑う心が全くない(二心がない)のですから、これをとらえて「信相^{しんそう}釈」といわれるのであります。

お喚び声が聞こえる究極は、必ずしも自らが称えなくても、念仏申さんと思いつ心の起こるとき、既に如来様のご本願のお心を受け入れていますから、親鸞聖人は聞名の人をもその対象として広く含められたのだと窺うことができます。

しかし、こういう仕方はいつでもどこでもプラクティカルに成立する仕方だとは言えませんから、「称名抜きの聞名」は、「称名して聞名する」場合の不完全実施ととらえる方が無理がないのだということができないのではないのでしょうか。

信心を頂戴するときには最初のその時があったとしても、念仏者はその後の人生において、称名念仏する都度、如来様のお喚び声に呼び覚まされ続けるということが起こります。

かくして「乃至」のいまひとつのお心は、信心獲得後に念仏者がお育てに与る契機を与えられたお心だと頂戴することができます。

もちろん、称えれば聞こえて下さる如来様のお喚び声に呼び覚まされてはその都度、新たな歡喜が催されることはむしろ自然です。

だから信心獲得後には称名の都度、報恩感謝の思いが蘇るということになりはします。けれども、衆生の身口意の三業に上る感謝の思いは、如来の勅命に呼び覚まされるという本質的体験に伴う二次的な効果にすぎません。このことから「乃至十念」が報恩感謝の念仏だけではないのだということが知られるのであります。

尚、ご常教は、信心が先で念仏が後だとしつつも「信相続の為の易行」というまことに無理な表現をお取りになります。

なぜなら「信相続の為の」とする限り、行の結果が信相続となるという趣旨で信前行後のロジックを破壊しており、矛盾概念を孕んだ懸念が残るからであります。

以上、「乃至十念」のお心についてお尋ねしてみました。合掌

正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)
〒520-0501 大津市北小松四五番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥
http://syohgakuji.web.fc2.com/ E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp